

令和 4 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (2) グローバル化に対応した人材育成に関する事業
(5) 地域への文化発信の拠点となる取り組み

申請組織 国際コミュニケーション学部

申請組織長 役職名 教授 氏名 田所 光男

統括責任者 役職名 教授 氏名 水島 和則

課題名 花文化・園芸文化を軸とした地域の情報発信と国際交流の実践

	役 割	氏 名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	水島 和則	国際コミュニケーション学部・教授	事業全般を担当

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

名古屋市の東山動植物園と星が丘テラスを運営する東山遊園が共創連携する「ボタニカルタウン」構想に国際コミュニケーション学部が参加し、持続可能な社会の実現という世界的課題と、自然との共生で育まれたサステナブルな日本の生活文化とを結びつけた新しい文化の創造と発信に寄与し、そうした文化を基盤とした国際交流を進めることを目的に連携事業をスタートした。この事業連携は 2022 年度で二年目となり、一年目には「コットンプロジェクト」、SDGs に則った「ブラインドレストラン」開催などの成果を上げている。

二年目の事業目的は (1) 社会人の指導のもと、植物の生態や日本固有の花文化を学び直し外国人に説明できる知識を身につけ、植物園の英語パンフレットとウェブサイトを作成する。

(2) 星ヶ丘を舞台に、植物と園芸をテーマにした市民交流を企画・実現する。

以上の 2 点であった。

2. 事業方法（特色・独創性）等 (300 字程度で記述)

この事業は、動植物園の（元）職員、東山遊園（株）の経営者や社員、商業施設に出店する店舗を経営する会社の経営者や社員、東海地域で園芸産業や花文化を推進するプロの担い手、市職員や菊里高校の教員など、星が丘のコミュニティ構築と情報発信に関心を有する数多くの社会人が学生のメンター、アドバイザーを務める点に特色がある。

事業に参加する学生たちは、授業内外で連携事業にチーム単位で参加し、ハッシュタグをつけた SNS 発信も試みるなど、コミュニケーション力を軸とする実践力を身につけることができる。

また、これらの連携事業を通して、椙山女学園大学の地域貢献を幅広く発信できることに特色がある。

3. 事業の成果（600字～800字程度で記述）

- (1) 綿花を自分たちの手で栽培することで、商品のトレーサビリティや商品の背景について理解を深めるコットンプロジェクトを昨年に引き続き実施した。
- (2) 東山植物園内の茶室（也有園付属の茶室）に専門家である山本祐子講師を招き、俳句会を実施した。学生たちは季語を取り入れた俳句を、花を前にして読むことを初体験し、日本文化への理解を深めた。
- (3) 昨年度の事業連携で星ヶ丘テラス活性化のアイディアとして学生から出された「フラワーカーテン」が、(株)メイガーデンズによって実際にテラス内に実現された。
- (4) みどりの日の5月4日にメイガーデンズの柵山氏の指導で、ウクライナにちなんだひまわりの鉢をテラス内の階段に並べるなど、星ヶ丘テラスの同日イベントに参加した。
- (5) 愛知豊明花き流通組合理事長の永田晶彦氏のガイドで東山植物園内の「万葉の散歩道」をめぐり、万葉集にうたわれた短歌の背景にある歴史や出来事、文化を学んだ。
- (6) メイガーデンズの柵山氏の指導で、「母の日」終了後に花が大量に廃棄されるロスフラワー問題に対処するため、植物園内大温室に水を張って花を浮かべるフローティングフラワーを実施した。これは大きな反響があり、写真を撮った一般市民から手紙が寄せられた他、中日新聞にも紹介記事が掲載された。取材が間に合わなかったものの、紹介記事をみたTVメディアからも問い合わせがあった。
- (7) 華道石田流会長の石田秀翠氏による、国際的視野でみた日本の華道文化について講演会を実施した。
- (8) 東山植物園活性化のためのアイディアを出すプレゼン大会を実施し、広告・マーケティングのプロであるメゾネット（株）の山本雄平氏による審査と講評をおこなった。
- (9) 星ヶ丘植物園を舞台とした外国人との交流を企画・実現する前提である植物園の英文パンフレットについては現在編集集中で、3月発行の予定である。

4. キーワード（本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載）

① SDGs	② 植物文化	③ 園芸文化	④ 自然との共生
⑤ コットンプロジェクト	⑥ フローティングフラワー	⑦ ボタニカルタウン構想	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

植物園英文パンフレットの作成スケジュールが遅延し、3月にずれ込んだことが反省点である。

東山植物園がシンガポールの植物園と交流事業をおこなっていたため、秋までに英文パンフレットをシンガポールの植物園に置いてもらうことが目標だったが、実現できなかった（交流事業は続いているので、引き続きシンガポール側に手渡すことをめざす）。

遅延の理由として、関心をもつ学生を公募してチームビルドをする方式により、試験・レポート提出などのアカデミックカレンダーに左右され、2月に入らないと本格的な打ち合わせ、作業がスタートできなかったことが挙げられる。

また、植物園の茶室などを舞台に在名古屋外国人との交流を実現するプランについては、ウクライナからの難民招待などを検討したものの、生活基盤の確保など優先課題があるため、実現が難しかった。一般的にいつて2022年度にコロナ感染状況が終息したとはいえ、対面的交流はハードルが高かった。